



創刊に寄せて

学長 竹本 吉夫

かねてより懸案の『日本赤十字秋田短期大学 紀要』が、いよいよ創刊の運びとなり、衷心よりお慶び申し上げます。

何ごとも新しいことへの取り組みは大変で、かなりの手間ひまを要するが、それを可能とするのは、一握りの人たちのヤル気と創意に満ちた行動力である。

紀要編集・発刊を担当された山本捷子教授をはじめとする編集委員会ならびに関係各位の多大なご尽力に深く感謝したい。

日本赤十字秋田短期大学は平成八年四月、1 大学（東京）、2 短大（武蔵野、愛知）を擁する学校法人「日本赤十字学園」の第4 番校として、秋田市上北手に開学した。平成十年には、隣接地に秋田赤十字病院（病床数496床）が新築移転され、両施設はブリッジで結ばれ一体化される。かかる構造形態は全国的にも稀で、管理運営面での効率化とともに教育研究面でも大きな効果が期待される。

本学は、看護と介護福祉の二学科を併設し、そのうち看護学科は3年課程、一学年定員80名である。その前身の秋田赤十字看護専門学校は、看護婦養成では東北で最も長い88年の歴史と伝統をもち、県民からも高い評価と信頼を受けてきた。一方、介護福祉学科は、日赤としては初めての取り組みであり、2年課程一学年定員50名で発足した。

最近、わが国の教育界をめぐる諸情勢は急激に変化し、高等教育機関においては、そのいずれもが新しい時代に対応した自己改革を迫られている。

近年における人口の少子化・高齢化の加速と平成四年度をピークとする18歳人口の減少、科学技術の高度化、国際化・情報化の進展、生涯学習社会への移行、さらには女子学生の4年制大学指向の高まりなど、短期大学をめぐる状況の変化に、どのように対応しながら教育研究の活性化と個性化を図っていくか、また地域社会との連携を深めていくかが、短大自体の生き残りを賭けた切実な課題となっている。

本学は開学にあたり、赤十字の理念である「人道」を身をもって地域社会において実践し、国際的視野に立っても行動できるヘルスマンパワーの養成を目指した。さらに特色ある専門教育として、第一に看護学と介護学の独自性と調和の探求、第二に生活・健康科学を基調とした看護・介護のできる人材の育成、第三には実践能力を高めるための卒前・卒後教育の一貫性の確立に力点をおいている。

これまでの医学・医術のめざましい進歩によって、感染症をはじめ多くの病気が征服されてきたが、その反面、急速な人口高齢化の進展と疾病構造の変化によ

って、年々病人が増え続けていることも紛れのない事実である。

今後、如何にして減らしていくか、また如何にして“持病息災”で天寿を全うさせるか、これがこれからの医療の焦点となろう。

現代の医療はあまりにも“病気”ばかりを追い過ぎたのではなかろうか。

“病気”に目がくらみ、“健康とは何か”をなおざりにし、肝心な“病人”をも見失っているのではないだろうか。ここで、“病気中心”から“健康中心”へと視点を変え、「からだところどころのまるごと健康」を指向しながら、人間誰しもがもっている「内なる自然の治癒力」を癒しの原点に置き、「患者が自ら癒し、施療者は援助する」といった新しい取り組みが必要だと私は考えている。

さらにまた、看護と介護の研究にあたって、常に「患者について学ぶ」という謙虚さと未知なるものへのひたむきな探求心を失うことなく、サイエンスとアートの両面の研鑽を積み重ねていってほしいと願っている。

『紀要』は、日赤秋田短期大学の教育研究活動とその業績の単なる年度別の総まとめだけではなく、同時にそれは、本学の明るい未来を開拓していくためにプロスペクティブに活用されるべき貴重な情報資源としての価値を有している。

願わくば向後、この「紀要」に盛り込まれる内容が年々より充実し、発展していくことを心から期待してやまない。